



わたしは両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのように、
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう
たくさんなうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

わたしと小鳥とすずと

金子みすゞ

3年生の教科書に載っている詩です。テレビで紹介されることもあって、ご存じの方も多いことでしょう。

私(わたくし)自身、これまで金子みすゞさんについて調べたこともなければ、ましてや作品の研究もしたこともありません。ただ、各種のマスコミを通して、彼女の生い立ちや

人生について知っているだけです。決して幸福では無かったと聞いています。

そんな情報が頭に残っていると、この詩を再び読んだときに、以前とはまた違った見方が、そしてその一言一言に深い意味があるように思えてきます。

詩にふれたときのその人の年齢や人生の経験によって、その詩への思いや考え、願いが異なるのは当然のことかもしれません。詩に限らず、絵や物語、音楽や映画、ひいては食べ物でも同様ですから。だからこそそれらを何度も味わう楽しみがあるというものです。

この詩で僕が決して譲れない部分。それは最後の一行のところ。『みんなちがって、みんないい』というところ。ここだけはいくつになっても私の思いは一緒です。

学校・学級は、均一で等質な工業製品を生産しているところではありません。学校・クラスの子どもたちは“みんなちがって、みんないい”んです。一人一人のそれぞれの成長を見ることができこの仕事大好きです。